

月例会ダイジェスト【91】

女性特有の健康課題をテクノロジーで解決するための商品やサービスの総称「フェムテック (FemaleとTechnologyの造語)」。4月の月例会はそのフェムテックに焦点を当て「フェムテック (Femtech) で見える化する、働く女性の隠れ我慢」というテーマで開催された。コーディネーターは小島健一氏 (鳥飼総合法律事務所) と武藤剛氏 (北里大学) が担当した。

まずは中江華子氏 (関東中央病院) による講演「フェムテックで見える化する、働く女性の隠れ我慢」からスタートした。

中江氏は冒頭でフェムテックの概要を述べたあと「女性ホルモンの基礎知識」として、女性の生理の仕組みについて解説。1カ月という月経周期の間にホルモンの分泌量に変化する影響で、女性は心身面でさまざまな不調を抱えてしまうことを説明した。

次に「働く女性の隠れ我慢」として、ある製薬会社のアンケート調査を例示した。「不調を我慢して仕事や家事をした」と答えた女性が全体の約8割いたことや、我慢して体調を悪化させた人の割合が我慢した人の約6割だったことを紹介し「自分がつらい症状を我慢していたことに気づいてもらうこと (見える化) が必要だ」と訴えた。

次に具体的なフェムテックの活用例に話題を変え、中江氏が関わっている女性の健康支援サービス「フェムクル (FEMCLE)」を紹介した。その中で他者と比較したり数値化したりすることが難しい月経量について、フェムテックを使った問診で過多月経と判断された人が、対象集団の中で6割以上いたという調査結果を見せた。中江氏は「本人にしてみれば、自分の月経量が多いと思っていない」と、ここでも“見える化”の問題を挙げ「過多月経の裏には子宮筋腫などの疾患が隠れている場合がある。疾患でなくても症状を軽くする治療法があるので、女性が抱える健康問題を“見える化”し、専門家につなげていくのがフェムテックの役割」と話した。また、過多月経を含めた女性特有の症状で「パフォーマンスが下がる」と回答した女性が一定程度の割合で存在するデータも示し「プレゼンティーイズムの観点から、企業も積極的にフェムテックを活用してほしい」とアピールした。

「女性従業員が不調を我慢せず、解決に向けたアクションを起こすためには職場の理解と協力が不可欠」という中江氏は、実際に多くの女性から上がってくる職場への要望の一つとして、生理休暇を取り上げた。厚生労働省による令和2年度の調査では、生理休暇の取得率が女性従業員の0.9%にとどまっている点を挙げ、その背景には「言いづらい」という

心理的なハードルや「有休を使うように言われた」など、社内の意識に由来する問題があることを指摘した。その上で、「そもそも仕事を休むほどの症状なら治療が必要。休むために生理休暇を取得するのではなく、婦人科を受診する機会と考えてほしい」と、産婦人科医の視点から生理休暇の捉え方を述べた。

最後に「心身面の不調を我慢して働く女性たちの“隠れ我慢”に見える化することで、自分たちの健康課題を認識してもらい改善につなげる。その結果、誰もが働きやすい職場になるのが最終的なゴール」と、フェムテックの理念を総括して講演を終えた。

休憩のあと、石井りな氏 (フェミナス産業医事務所) の指定発言から後半が始まった。

石井氏は女性の健康に関する“困った相談事例”として、「毎月必ず生理休暇を取得して年間24日休む女性従業員に対し、ほかの従業員から不満が出ている」というケースを紹介した。これについて石井氏は「自己保健義務の延長線上に生理休暇があると捉え、休みを使って病院へ行くなど自分の健康を自分でコントロールしようとする姿勢が必要ではないか」と見解を示した。また、生理休暇はPMSのような月経前の症状に適用できない点にも触れ「月経前でも取得ができないか議論が出ている」と述べた。

その後、質疑応答とディスカッションに移った。参加者から出てきた質問の中には「健診でヘモグロビン値が低かったのに、本人に自覚がなく受診してくれない」という、まさに“見える化”に関わるものがあった。中江氏は「試しに鉄剤を服用してもらったら症状がぐんぐん改善して、初めて自分が貧血だったことに気づいたというケースがあった。疾病の有無にかかわらず『この状態は異常だ』と、とにかく認識してもらう必要がある。“1回治療をしたら気分が良くなった”などの成功体験があれば、受診のハードルを下げられるかもしれない」と回答した。

また「更年期で不調を抱える社員をどうサポートすればよいか」という悩みが出た時には、育児や介護、通院など幅広い範囲で休暇が取得できる制度を設けた企業の例が紹介された。

今回話し合われた女性の健康問題の陰には、従業員本人の意識や事業者側のリテラシーの問題が少なからず影響している実態が見えてきた。月例会の総括では、本人の気づきや職場の理解につながるような啓発活動を地道に続けていく必要性も言及されたが、その一助としてフェムテックの活用を検討する余地は大いにあるだろう。

さんぽ会の詳細は下記サイトをご覧ください。

- ホームページ <http://sanpokai.umin.jp>
- FB ページ <http://www.facebook.com/sanpokai>